

日本 ASEAN 友好協力 50 周年を迎えて

アジア経済交流センター長 鎌田 慶昭

昨年、日本と ASEAN（東南アジア諸国連合）は友好協力 50 周年の節目を迎えた。

この機会に、様々な歴史に彩られた日本と ASEAN の関係を顧みて、各国の現状を踏まえ、これから先日本が ASEAN とどう向き合っていけば良いか、共に考えていきたいと思う。

I. 日本 ASEAN 友好協力 50 周年

a. 首脳会議

2023 年 12 月、東京で日本 ASEAN 友好協力 50 周年特別首脳会議が開催された。

当時の ASEAN 議長国インドネシアのジョコ・ウィドド大統領を始め、ブルネイのボルキア国王、フィリピンのマルコス大統領、シンガポールのリー首相、ベトナムのファム・ミン・チン首相、マレーシアのアンワル首相、カンボジアのフン・マネット首相、タイのセター首相、ラオスのソーンサイ首相等、ミャンマーを除く ASEAN 9 か国の代表が一堂に会し（東ティモールのグズマン首相はオブザーバーとして出席）、互いに心と心の繋がりを次世代につなぎ、地域、及び世界の平和、安定、繁栄を共創するパートナーとして共に協力し合うことを確認し、計 130 の実施計画が採択された。



50th Year of
ASEAN-Japan
Friendship and Cooperation

輝ける友情、輝ける機会

b. 和食イベント

上記首脳会議に先立ち、2023 年は ASEAN 各地で 50 周年を記念する様々なイベントが実施された。近年、中韓の ASEAN 進出が目立ち、日本のプレゼンス低下が危惧されていることもあり、これを機に日本をアピールし、日本への理解を深めてもらうための様々な努力が払われた。

11 月 21 日には、ジャカルタの ASEAN 事務局で「強靱で持続可能な農業と食料システム推進のためのイノベーション・シンポジウム」が開催され、昼食時の和食イベントでは、ASEAN 事務局及び各国・対話国代表部の来賓を含む 160 名の参加者を迎え、巻きずし体験や、ブリの解体ショー等が行われた。デモンストレーション後は、ブリの刺身やしゃぶしゃぶが参加者に振る舞われ、和食の良さと共に ALPS 処理水の海洋放出を機に中国から輸入を全面禁止されている日本の水産物の美味しさと安全性をアピールした。



巻きずし体験（右端が紀谷 ASEAN 大使、筆者撮影）

II. ASEAN あれこれ

a. 設立からの足取り

1967年当時、アメリカのジョンソン政権の意向で、東南アジアの親米諸国をまとめ、域内共産化の防波堤にするという政治的な意図により ASEAN が誕生したとされている。

しかし、東西冷戦が終結した後は、ベトナム、ラオス等の社会主義国も ASEAN に加盟し、経済面での結束を志向することとなった。

| | |
|-------|---|
| 1961年 | マラヤ連邦（現マレーシア）、フィリピン、タイによる東南アジア連合（ASA）発足 <1965年インドネシア 9.30 事件により、スカルノ政権が崩壊、スハルトによる反共政権が誕生> |
| 1967年 | 上記3か国にシンガポール、インドネシアが加わり、5か国（原加盟国と呼ばれる）による ASEAN が成立。 ASA は発展的解消 <1973年日本からの合成ゴム輸出交渉を皮切りに、日本-ASEAN 間の対話・友好関係が始まる> <1975年サイゴン陥落、ベトナム戦争が終結> |
| 1976年 | 第一回 ASEAN 首脳会議をバリ島で開催。東南アジア友好協力条約（TAC）、ASEAN 協和宣言を採択。 ASEAN 事務局をジャカルタに設立 |
| 1984年 | ブルネイが ASEAN に加盟 <1989年ベルリンの壁崩壊、1991年ソ連崩壊⇒米ソ対立（東西冷戦）が終結> |
| 1992年 | ASEAN 自由貿易協定（AFTA）が締結され翌年発効。域内の関税撤廃を目指す |
| 1995年 | ベトナムが ASEAN に加盟 |
| 1997年 | ラオス、ミャンマーが ASEAN に加盟 <1997年アジア通貨危機により、タイ、インドネシア、フィリピン等の通貨が暴落> |
| 1999年 | カンボジアが ASEAN に加盟し、加盟国数が現在の10か国となる <2002年東ティモールがインドネシアから独立。ASEAN には加盟せず> |
| 2008年 | ASEAN 憲章発効、各国の主権を認めつつ、域内の平和、安全、安定に向けた結束を促す |
| 2015年 | ASEAN 経済共同体（AEC）が発足、域内の関税撤廃だけでなく、サービス、投資、人の交流など、広範囲にわたる自由化を推進し、人口7億にせまる一大経済圏の形成を目指す |

b. 黎明期のカリスマ・リーダー達

原加盟国であるシンガポール、フィリピン、マレーシア、インドネシアには、自国の経済を強烈にけん引したカリスマ・リーダー達がいた。

シンガポール：リー・クワン・ユー首相 1959～1990年
 フィリピン：マルコス大統領 1965～1986年（現マルコス大統領の実父）
 インドネシア：スハルト大統領 1967～2003年
 マレーシア：マハティール首相 1981～2003年（2018～2020年に再任）
 （マルコス、スハルト両大統領は、政権末期に長期独裁の弊害が出て、結果的に失脚した）

4人が揃った1981年～1986年は各国の結束が強く、意思決定も早かったと、マハティール元首相ご自身が述懐されていた。（2018.11.6. マレーシア・ビジネスフォーラムの基調講演にて）

c. 各国の概要

ASEAN は「モザイク」と呼ばれるほど多様性に満ちており、国土の広さ、経済規模、国家体制、通貨、宗教等、国ごとに様々であり、スケールも大小様々である。

例えば、最大の国土を持つインドネシアは、最小のシンガポールの 2,662 倍であり、国内総生産（GDP）では最大のインドネシアが最小のブルネイの 625 倍となっている。しかし、国土最小のシンガポールは 1 人当たり GDP では ASEAN で断トツの 1 位であり、2 位が GDP 最小のブルネイである。また、1 人当たり GDP の世界ランキングを見ると、シンガポールが 6 位、ブルネイが 26 位であり、32 位の日本よりも上位である。

ASEAN 基礎データ

| | 面積 (Km ²) | 人口 (万人) | 人口 密度 (人/Km ²) | 名目 GDP (億米 ^{ドル}) | 成長率 (%) | 1人当たり GDP (米 ^{ドル}) | イン フレ率 (%) | 通貨 | 国家代表 | 政治体制 | 主な宗教 | 独立 (旧宗主国) | 日本との 国交樹立 | ASEAN 加盟 |
|--------|--------------------------|------------|----------------------------------|----------------------------------|------------|------------------------------------|------------------|---------------|---|-------------|-------|---------------------|--------------|-------------|
| ブルネイ | 5,765 | 44 | 76 | 167 | 1.6 | 37,851 | 3.7 | ブルネイ・ドル | ハナサル・ボルキア国王 (首相兼任) | 立憲君主制 | イスラム教 | 1975 年 (イギリス) | 1984 年 | 1984 年 |
| カンボジア | 181,035 | 1,599 | 88 | 288 | 5.2 | 1,802 | 5.3 | リエル | ノロドム・シハモニ国王 フン・マネット首相 | 立憲君主制 | 仏教 | 1953 年 (フランス) | 1955 年 | 1999 年 |
| インドネシア | 1,916,862 | 27,486 | 143 | 13,188 | 5.3 | 4,798 | 4.2 | ルピア | ジョコ・ウィドド大統領 | 共和制 | イスラム教 | 1949 年 (オランダ) | 1958 年 | *1967 年 |
| ラオス | 236,800 | 748 | 32 | 153 | 2.3 | 2,047 | 23.0 | キップ | トロンクン・シースリット主席 ソーンサイ・シーバントン首相 | 人民民主 共和制 | 仏教 | 1953 年 (フランス) | 1955 年 | 1997 年 |
| マレーシア | 331,338 | 3,265 | 99 | 4,070 | 8.7 | 12,466 | 3.4 | リンギ | イブラヒム・イスクンダル 第 17 代国王 アンワル・イブラヒム首相 | 立憲君主制 | イスラム教 | *1957 年 (イギリス) | 1957 年 | *1967 年 |
| ミャンマー | 676,576 | 5,389 | 80 | 662 | 2.0 | 1,228 | 16.2 | チャット | ミン・アウン・ライン議長 (国家統治評議会議長兼任) | 共和制 | 仏教 | 1948 年 (イギリス) | 1954 年 | 1997 年 |
| フィリピン | 300,000 | 11,157 | 372 | 4,043 | 7.6 | 3,624 | 5.8 | ペソ | フェルディナンド・ マルコス大統領 | 立憲共和制 | カトリック | 1946 年 (アメリカ) | 1956 年 | *1967 年 |
| シンガポール | 720 | 564 | 7,833 | 4,668 | 3.6 | 82,808 | 6.1 | シンガポ ール・ドル | ハリマ・ヤコブ大統領 リー・シェンロン首相 | 立憲共和制 | 仏教 | *1965 年 (イギリス) | 1966 年 | *1967 年 |
| タイ | 513,140 | 7,008 | 137 | 4,954 | 2.6 | 7,070 | 6.1 | バーツ | ラーマ 10 世 国王 セター・タウィーシン首相 | 立憲君主制 | 仏教 | **1932 年 | 1887 年 | *1967 年 |
| ベトナム | 331,230 | 9,946 | 300 | 4,065 | 8.0 | 4,087 | 3.2 | ドン | グエン・フーチョン書記長 ヴォー・ヴァン・トゥオン主席 ファム・ミン・チン首相 | 社会主義 共和制 | 仏教 | ***1945 年 (フランス) | 1973 年 | 1995 年 |

* 1957 年にマラヤ連邦として独立、1965 年シンガポール分離後にマレーシアとして建国

** タイは 1932 年の立憲革命により現立憲君主制が確立、植民地となった経験なし

*** 1946 年より再支配を目論むフランスとの間で戦争が勃発、1953 年にフランスが降伏したが、1954 年のジュネーブ協定により、国が南北に分断された

出典：IMF World Economic Database, Oct. 2023

d. 最近のトピックス

- ・ 2月2～4日、タイ・バンコクで「ジャパン・エクスポ・タイランド 2024」開催
今年のテーマは「ジャーニー・トゥ・ジャパン」であり、モノよりもコトの発信を重視
- ・ ベトナム、ビンファストがインドネシアに EV 工場建設を予定、2026 年より生産を開始。同時に
同国でのタクシー事業開始も視野に置いている
- ・ インドネシアは 2月14日が大統領選挙の投開票日であった。3組(副大統領候補とペア)の候補の内、前回、
前々回ジョコウィ現大統領と戦って敗れたプラボウォ大統領候補とギブラン副大統領候補（ジョコウィ大
統領の長男）ペアの得票が過半数を大きく上回り、当選確実となった。

- ・1月29日にラオスで開催された ASEAN 外相会議に、これまで国軍が会議参加を拒否していたミャンマーより外務省高官が出席、同国の避難民を対象とした人道支援の強化で一致した
- ・1月31日、マレーシアのイブラヒム・イスカンダル氏が第17代の国王に即位

Ⅲ. ASEAN と日本の関わり

a. 主な出来事

| | |
|-------|---|
| 1967年 | ASEAN 設立 |
| 1972年 | タイにおいて、日本品不買運動が勃発 当時タイは対日貿易赤字が深刻化しており、同国の民主化運動に連動する形で展開された |
| 1973年 | 合成ゴム輸出に関する日本と ASEAN の話し合い開始 合成ゴム輸出を希望する日本と天然ゴムを主力産業とするマレーシアを始めとする東南アジア諸国との対話が行われ、これが日・ASEAN 友好協力関係のきっかけとなった（戦前の日本は、東南アジアでの天然ゴム栽培に積極投資していた。歴史の皮肉である） |
| 1974年 | 1月15日にインドネシアにて「マラリ事件」発生 田中角栄首相のジャカルタを訪問時に起きた反日暴動。日本がインドネシアを経済支配しているとして、日本車に火を付けるなど、日本品排斥運動が繰り広げられた。 今では、政権内部で勃発していた権力闘争に利用されたということが定説になっている しかし、市場における日本品の存在が日増しに大きくなっていくことも事実であり、この暴動発生を重く見た日本政府は、同国のインフラ整備への協力強化（ODA 支出額大幅増）と共に、経済だけでなく文化面での交流推進にも尽力することになった |
| 1977年 | 第一回 日・ASEAN 首脳会議がクアラルンプールで開催 福田赳夫首相が「福田ドクトリン」をマニラで発表。日・ASEAN 外交の基本原則となる ＜福田ドクトリンの要旨＞ 1. 日本は軍事大国とならず世界の平和と繁栄に貢献する 2. ASEAN 各国と心と心の触れあう信頼関係を構築する 3. 日本は対等なパートナーとして、ASEAN 諸国の平和と繁栄に寄与する |
| 1981年 | 日本アセアンセンターを東京に開設 |
| 1988年 | 日本企業の提案により、タイ、マレーシア、フィリピンとの合意による自動車部品相互補完（BBC）スキームがスタート。後にインドネシアも加わる |
| 1999年 | アジア通貨危機のダメージが甚大なインドネシア、タイへの ODA 支出の大幅増額 |
| 2004年 | 東南アジア友好協力条約（TAC）に日本が加盟 |
| 2008年 | 日・ASEAN 包括的経済連携（AJCEP）協定署名 |
| 2010年 | ASEAN 首脳会議（ハノイ）にて「ASEAN 連結性マスタープラン」を採択 日本より ASEAN 担当大使がジャカルタに常駐（ASEAN 非加盟国として初） |
| 2011年 | ASEAN 政府代表部を開設。ASEAN 非加盟国としては2番目（1番目は米国） |
| 2016年 | ASEAN 首脳会議（ビエンチャン）にて「ASEAN 連結性マスタープラン 2025」を採択 |
| 2019年 | ASEAN が「インド太平洋に関する ASEAN アウトルック（AOIP）」を発表。当時の安倍首相はこれを支持し、「自由で開かれたインド太平洋（FOIP）」とのシナジー追及を表明 |

b. 日本の政府開発援助 (ODA)

日本の ODA 支出額は、1961 年から 2022 年にかけて総額約 1,400 億ドルとなっており、世界に冠たる ASEAN 援助国であった。しかし、近年は民間によるインフラ投資 (PPP) 増大への期待から、ASEAN 向け ODA 支出額を減らし、中東、アフリカ、南西アジア方面に軸足を移しつつある。

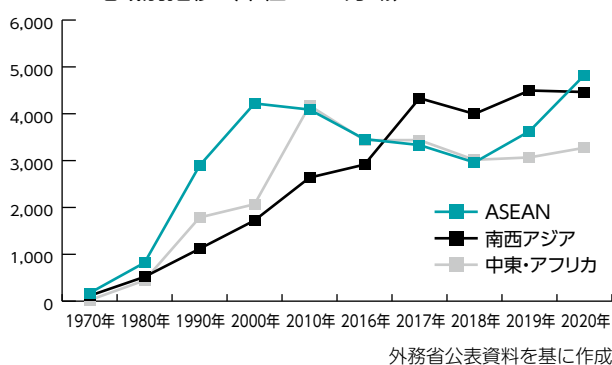
一方、インドネシア、ラオス、フィリピン、ミャンマーなどは、借りやすい (審査が甘い) アジアインフラ投資銀行 (AIIB= 中国が推進) を多く活用するようになっており、これが習近平政権の目指す一帯一路政策の資金源ともなっている

日本の ODA (政府開発援助) 国別実績
(1969 ~ 2020 年 単位 100 万ドル)

| | 無償援助 | 技術協力 | 有償援助支出 | 合計支出額 |
|--------|-------|-------|--------|---------|
| ブルネイ | | 46 | | 46 |
| カンボジア | 1,859 | 987 | 654 | 3,500 |
| インドネシア | 2,079 | 4,077 | 35,911 | 42,066 |
| ラオス | 1,413 | 832 | 312 | 2,557 |
| マレーシア | 114 | 1,577 | 6,387 | 8,078 |
| ミャンマー | 5,797 | 1,077 | 5,954 | 12,827 |
| フィリピン | 2,720 | 2,741 | 19,904 | 25,364 |
| シンガポール | 77 | 28 | 266 | 371 |
| タイ | 1,056 | 2,984 | 15,513 | 19,553 |
| ベトナム | 1,218 | 2,129 | 20,722 | 24,069 |
| 合計 | | | | 138,895 |

出典：外務省公表資料

ODA の地域別推移 (単位 100 万ドル)



c. 対等なパートナーへ

1. 優位性の喪失

1977 年の福田ドクトリンで「対等なパートナー」を標榜した頃、日本と ASEAN とでは経済力で大きな差があり、決して対等ではなく、その後も一方的な「援助 = 非援助」の関係が続いた。

ASEAN と日本の対話が始まった 1973 年時点での ASEAN の GDP 合計 515 億ドルに対し、日本は 8.5 倍の 4,410 億ドルだったという。

1980 年の IMF データを見ると、ASEAN の GDP 合計は 2,086 億ドルまで急成長したが、日本の GDP は既に 1 兆ドルを超えていた。

2000 年代になると、生産基地或いは市場として ASEAN に対する期待が高まり、投資・貿易先としての存在感が増し、チャイナプラスワンの候補地としても注目が高まってきた。ODA・海外直接投資の両輪により順調な成長を遂げた ASEAN は、2022 年になると GDP の合計が 3 兆 6,258 億ドルに達し、4 兆 2,375 億ドルの日本が抜かれるのは時間の問題と思われる。

ASEAN 諸国が豊かになり購買力が増してくるに従い、市場として益々注目の的になってきたが、同時に中国、台湾、韓国などとの競争も激化し始めた。かつてヒト、モノ、カネで ASEAN をリードしてきた (とっていた) 日本であるが、今では相手から選ばれる立場になってきているのである。にもかかわらず、今でも日本の優位性を信じ込み、ASEAN 諸国の人達を見下すような態度をとる化石のような人が時々いるのは残念なことである。

過去に日本で成功したビジネス・モデルを ASEAN に持ち込むパターンは、今でもあるかも知れないが、反対に日本が ASEAN に大きく遅れをとってしまい、後追いになっているケースもある。

ネットを活用した食材・日用品のデリバリーサービスは、日本よりデジタル化が進んだ ASEAN の方が遥かに先行しているし、ASEAN では以前から当たり前になっていたライドシェアも日本では漸く検討に入っている段階である。

2. 親日の国々

ASEAN は国土や経済力など大小様々な国々で構成されており、1 人当たり GDP で日本を大きく上回っているシンガポールは、今ではアジア最大の対日投資国ともなっている。トップランナー

であるシンガポールも含め、ASEAN 諸国の対日感情は概して良く、日本に対する親しみ、リスベクトは今でも持ってくれているようだ。

外務省の「令和3年度 ASEAN における対日世論調査結果」によると、「日本が信頼できる」という回答が ASEAN 全体で 92%（とても信頼できる 47%、どちらかと言うと信頼できる 45%）であり、最高がラオスの 99%（ちょっと意外だが）、最低のシンガポールでさえ 82% だった。

一方、「重要なパートナーは？」（複数回答可）については、ASEAN 全体では中国を選択した人が 56% で、日本の 50% を上回った（アメリカは 45%）

国別にみると重要なパートナーとして中国よりも日本を選択した人が多かったのが、フィリピン、ベトナム（いずれも大差）、インドネシア（小差）と、まさに南シナ海の領有権を巡り現在中国と揉めている国々であった。そうした中国との領海問題の有無や、中国への依存度の大小により、中国寄り、日本寄りの答えに反映しているが、基本的に ASEAN の国々は全方位であり、是々非々で相手国を選ぶ。とまれ ASEAN 諸国が親日、信日であることは日本にとり大きなアドバンテージであり、ODA や民間投資を通じた同地域への寄与や先人達の努力の賜物であり、我々はそれに甘えてはいけない。（余談だが、インドネシアで日本の敗戦後に当地に残り、独立のためにオランダと戦った残留日本兵に対する感謝の言葉をインドネシアのお年寄りからお聞きしたことがある）

3. 無限の可能性

繰り返しになるが、ASEAN はモザイクと呼ばれるほど多種多様な国々の集合体である。

成功の方程式や秘訣など語れる筈がないが、多種多様なニーズが至るところに散りばめられていると考えて良く、可能性は無限にあると言って良い。気候変動、医療・介護、感染症対策、教育、環境、リサイクル、エネルギー・食料の安全保障、防災等、ちょっと思いついただけでも数多くのフィールドがあり、自身の持つ機能やコンテンツを、どこで

どう絡ませて行くか？

物心両面で海外展開をサポートする諸機関（勿論、富山県新世紀産業機構も含まれる）の活用も検討されたい。

4. ASEAN 連結性への貢献

かつて日本は ASEAN 連結性支援として、橋、道路、鉄道などのインフラ整備に注力したが、今後はそれらに加え、ソフト面の連結性（税関、各種許認可、入出国管理、資格の相互認証他、制度に関わるもの）や、人種や宗教を越えた人と人の交流による一体感醸成への貢献が必要となろう。

5. 草の根交流の推進

友好協力 50 周年特別会議で確認された、心と心のつながりとはどのようなものだろうか？

国として、地方としてやるべきことはそれぞれあると思うが、国境を越えた人と人とのつながりを、国、県、各種機関などとは関係なく、会社、更に個人単位で草の根的な市民単位で構築して行きたいものだと思う。

海外駐在の時に感じたことだが、日本人の多くはいつでもどこでも日本人ばかりで群れている。仕事も遊びも旅行も、日本人で纏まっており、さながら日本社会を持ち歩いているようで、海外に居ることになっていない。この傾向は、他のどの国の駐在員よりも日本人に多い。勿論、日本人 1 人きりの職場で、現地に溶け込んで奮闘されている方々もおられるが…。

個々の国を越えた繋がりや関わりが、その国や地域への思い入れに繋がり、ビジネスチャンスのきっかけにもなるかも知れない。また、現地で困った時に本当に頼りになるのは現地の友達である。日本に好感を持ってきている ASEAN の人達とは友達になりやすいベースがあり、彼等との交流を通じ、学ぶべき点は学び、助け合い、趣味を共有するなどしながら、お互いの理解を深めて行くことが、ネットワークの構築、新たな事業展開のきっかけになると信じている。

以上